IP
il protagonista

イル プロタゴニスタ ｜ 2022年5月号 Vol.109 ｜ 発行：株式会社イルサルト 〒541-0047 大阪市中央区淡路町2-5-8 船場ビルディング411 tel 06-6209-0351

2022
vol.109
May

ゆるぎない技術で国益を守る
陰の立役者
南﨑 康貴さん（47）―株式会社放送サービスセンター

「考えてから」やるではなく「考えながら」やる。

Photographer：前田 紘平［photography office Discovery］
大阪市中央区淡路町2-5-8 船場ビルディング417 ｜ https://discovery.main.jp/

と命の危険にさらされる。これだけいろいろなことが次々に起こるいまの経営環境もおなじです。すぐ決めてとにかく行動しないと会社が危険にさらされる。その姿勢がなかにはワンマンすぎる、先代ならみんなの意見聞いていた、と言われることもあるのですが、やはりこれからの時代はスピード感が大事。考えてからやるではなく。考えながらやる。時代が変わればやり方が変わるのは当然のこと、イノベーションを起こすのが後継ぎの使命だとおもうのです。

国際会議が定期的に開催され、今年あった案件は翌年もおなじようにある。そんな流れもコロナ発生により完全に崩れさりました。ニッチな業界なので他社の参入もさほどなかったのですが、これだけテクノロジーが発達してくると思いもよらない会社が参入をしてくる可能性も考えられます。実際にいまZOOMやポケトークなんかもあり、手軽に翻訳できるツールは今後もいろいろと出てくるでしょう。そんななかで弊社の存在価値をどこにおくのか？　弊社の存在意義は国際会議・首脳会談・グローバル企業ミーティングや株主総会などにおいて正確かつ素早いコミュニケーションを可能にすること、今までであればリアルだけでしたが今後はオンラインもさらに増えていくでしょう。リモート会議にも対応できるシステムは整備完了しています。いろいろな言語や発音、婉曲的な言い回し、時には方言にちかいような表現もあるなかで発言者、通訳、そしてオーディエンスの人たちを安全につなぎ、それぞれの権益や立場を守るのが弊社のミッションともいえます。単に技術力で勝負するのではなくて、相手がなにを望んでいるのか？をしっかり理解すること。社員1人ひとりの大切な時間を共に過ごすことはとても大きなことです。充実していて1人ひとりが成長を感じられるような土壌をさらに整えていきます。お取引先さまにしてもスタッフにしても、お互いに必要と思える強くてシアワセな関係性をつくっていきたいですね。■

from IL SARTO

美しく記憶にのこる洗練された佇まい。

3代目経営者として「信頼をカタチにする」をモットーに安心安全な会議進行のお手伝いをさせている南﨑社長。この仕事の本質は、人種・思想をこえた正しいコミュニケーションの実現です。表舞台に出るのではなくコミュニケーションの下支え。完璧にやって当たり前、失敗が許されないという職人的な仕事。会議規模が大きくなればなるほど果たす役割は国家的なものになっていきます。そこでご提案をさせていただいたキャッチコピーが「ゆるぎない技術で国益を守る陰の立役者」。この役割に必要なのは、ここにありという強い存在感ではなく、美しく記憶にのこる洗練された佇まい。そこで調和・品格を感じさせるグレーに会社のイメージカラーであるブルーのネクタイで会社の顔としての装いが完成しました。

【株式会社放送サービスセンター】 〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町4-40 ｜ Tel.03-3357-3071

お仕立てのご予約は 090･8599･3213 いつでもご対応できるよう、携帯となっております。時間は気にせずおかけください。

代官山オーダー受注会　5月27日(金)～29日(日) | 6月24日(金)～26日(日) | 7月22日(金)～24日(日)　※イルサルト淀屋橋では随時オーダーが可能です。

IL SARTO NAPOLI ITALY

株式会社イルサルト
イルサルト淀屋橋　〒541-0047 大阪市中央区淡路町2-5-8 船場ビルディング411
イルサルト代官山　〒150-0034 東京都渋谷区代官山町14-6 レジェンド代官山302
Tel 06･6209･0351　Fax 06･6209･0352　HP http://ilsarto.net/　Open 10:00-19:00

IL SARTOの最新情報は下記のQRコードにアクセスしてください。
ホームページ　イルサルトfacebook　末永facebook　ブログ　メールマガジン

IP（il protagonista）とはイタリア語で「主役」
人にはそれぞれの人生があり、なにを大切にして生きるかは人によりさまざまし、しかし間違いないえるのは、それぞれの人生の主役はその人自身であること。主役たる人生を歩む方々に、人生の衣装番として寄り添いたい。私は今そんな思いで仕事をしています。IPはさまざまな人生の主役を紹介する、イルサルトが隔月に発行するニューズレターです。

「何を」するかよりも「誰と」するか。

1

2

3

4

東京オリンピックの年に祖父が創業。

私はいま国際会議における同時通訳システムのサービスを提供する「株式会社放送サービスセンター」の責任者として約80名のスタッフの陣頭指揮をとっています。もうすこし詳しく説明すると日本で開催される大規模な国際会議やイベント、たとえばAPEC、サミット、G20・G7・万博・IMFや世界銀行の会議・オバマ元アメリカ大統領の広島訪問などの各国首脳クラスの来日、また最近では東京オリンピックなど正確で早い通訳が必要な場面において会議やコミュニケーションが円滑にすすむお手伝いをさせていただいています。またそうしたシーンで培ったノウハウをもとにセミナーや結婚式などの運営・プロデュースも手掛けています。

1964年の東京オリンピックの年に祖父が創業をしたのが弊社のはじまりです。今年で58年目をむかえました。祖父はもともとNHKの技師、戦時中には軍事情報を電報でやりとりする仕事をしていました。オリンピックを開催すると世界中から人が集まってくる。そんな人たちのために何か役に立つことが出来ないだろうか？　と考えた祖父がはじめたのがそれぞれの国のニュースや番組を聞けるようなサービスでした。海外のラジオ番組が聞けるように回線を引き、録音して番組プログラムとして流すサービスです。たとえば1チャンネルはイタリア語、2チャンネルはフランス語などのようにプログラムを作り、ホテルで聞くことができる当時は存在すらしなかった画期的な事業を立ちあげたのです。

祖父のあと、会社をついだのが父。同時通訳の仕事がはじまったのも父の代からです。祖父の代でホテルとのパイプが強くなっていたのですが、いろいろなホテルで宿泊者向けのプログラムとか音響システムを作っているうちに国際会議が担当をしていた ホテルで行われることになりました。その国際会議というのが日本ではじめて開催されることになったIMF。この場面で同時通訳システムが必要になったのですが、ホテルの音響を仕切っていた弊社がホテルからの相談を受け、国内で初となる同通機器の開発に着手し、会議を運用したのが最初です。そしてなんとか問題なく仕事を完遂することができて、いろいろな場所でこのサービスを使えるようにしようと機材・人・システムを整備していきました。

小さい頃から家業を継ぐ気はなかった。

祖父、父とバトンが繋がってきたのですが、私自身は小さい頃から家業をやるつもりは一切なく、継ぐように言われたことは祖父からも父からも一度もありません。なので父の仕事内容もなんとなくで音響関係の仕事くらいしか認識がありませんでした。だから自由にいきようと思い、高校卒業後にアウトドアの専門学校にすすみました。アウトドアの専門学校でなに？　と思われると思いますが、カヌーとかキャンプ・パラグライダー・ロッククライミングを人に教えるインストラクターを養成する学校です。実は私、椎名誠さんがすごく好きなのです。小さい頃から自然が身近にある環境ではありませんでしたので逆に強い憧れをいだくようになっていました。そして椎名さんの世界に触れているうちに自分もそういうふうに生きたいなと思うようになったのが理由です。そして専門学校2年目は専攻をカヌーにしてインストラクター資格をとり、埼玉の長瀞で働きはじめました。

長瀞ではカヌーだけでなく、激流をくだるラフティングのガイドもやっていました。インストラクターとして観光客に教えるわけなのですが、日によって水流もちがえば天気もぜんぜんちがう。ライフジャケットを着ているとはいえ下手したら命の危険もあるわけです。だから当然こちらもすごく真剣になる。そんなんなか終わったあとお客様に「すごく楽しかった！本当にありがとう！」と言ってもらったらアウトドアで遊ぶ楽しさを共有できた仲間のように思えてすごくシアワセを感じていました。習得した技術を教え、教えた人もできるようになる。そして自然のなかでともに過ごす楽しさは充実感しかなくてあっという間に10年が過ぎ30歳になっていました。このまま一生インストラクターとして生きたいなと思っていたとき創業者である祖父が急逝しました。

当時会社の経営が思わしくなくなっていました。それなりに社員はいるもののファミリー企業なので母や叔母から会社のことを色々聞いているうちに、自分は戻ったほうがいいのではないか？　という気持ちになってきました。しかし当時の私はカヌーのインストラクター父の会社のことはよく分かっていません。戻ったところで戦力になれるとは思えない。でもなんでもいいから手伝えることをしようと思い、アルバイトとして父の会社に入りました。なぜアルバイトなのか？　というと周りが納得するだろうと思ったからです。社長の息子というだけで社員として入っても誰も認めない。まずはアルバイトではいり周りが納得してから次を考えようと決めました。父から指示をされたのは経理のアルバイト。請求書を発行したり、備品の発注とか、今から考えるとどのようなお金の流れになっているのか？　を父は理解させたかったと思うのですが、1年ほどやるなかでなんとなく全体像がつかめてきました。

仕事をなめている自分がいました。

1年ほどアルバイトをしたあと社員になり、現場仕事に入っていきました。同時通訳の現場なのですが、すでにシステムや流れがきちんと出来上がっているので現場での仕事ってすごくシンプルなのです。ボタンを押せば動く、押さないと動かない。そして操作間違いがおきたとしても必ずなんとかなるようなバックアップ体制ができている。属人的ではない仕組み。そこが弊社の一番の強みでもあるのですが、仕事の面白みや楽しさが見いだせなかったのです。それまではカヌーの現場で人の命をあずかっていたので、緊張感もすごくあってそこが充実感につながっていたのですが、今度は人が死ぬわけでもないし、優秀なシステムのおかげで間違えたらなおせばいい、気がついたら仕事をなめてしまっている自分がいました。だから仕事の失敗は数えられないほどあります。録音して納品するはずが録音できていなかったり。不用意な発言をしてお客さまを怒らせてしまったり。当時はなめている感覚はなかったのですが、当時の自分にアドバイスをするとしたらただ一言、仕事をなめるな！になりますね。

仕事をする中でわかってきたことがあります。それは、何をするか？　よりも誰とするか？　という人間関係が私にとっては遥かに大事だということ。カヌーの仕事がすごくたのしかったのは、カヌーそのものも、もちろん好きだったのですが、お客さまとふれあい、ともに過ごす時間がとにかく楽しかったのです。リピートで来てくれるような方もいて、カヌーもしたいけど、それよりも南崎さんに会いたいと思ってきたんだ！　と言われるとなんとも言えない心地よさとシアワセを感じていました。同時通訳の仕事自体にはなかなか面白みは見いだせないけど、いま一緒に仕事をしているこのメンバーに感謝し、ともに過ごす時間を楽しもう！　と考えるようになってから社員さんとの人間関係もどんどんよくなってきて、仕事自体の面白みも少しずつですが感じられるようには変化しはじめました。

だんだんと大きな現場をまかせられるようになり、副所長、所長と責任も大きくなり、2019年43歳のときに社長就任しました。社長になって一番変化を感じているのは、まわりとの関係性です。もっと言うとまわりの受け取りかたです。同じことを言っても受け取り方がぜんぜん違うのです。私は人とのつながりを何よりも大切にしているので、あえてフランクな言い方をすることもあったのですが、社長の発言になると冗談で終わっていた空気感が冗談ではなくなることもよくあります。どんな言葉を発するのがいいのか？　を更に真剣にならないといけないので、そういう意味でいうと窮屈といえば窮屈なのですが、立場によって当然変化をしていかないといけない部分はありますので、変に気負いするのではなく、成長するチャンスなんだと前向きに考えるようにしています。

イノベーションを起こすのが後継ぎの使命。

これは後継ぎの宿命であると思うのですが、先代とはなんでもすごく比較されますね。業界でも父は知られた存在ということもあり、社内外いろいろなところで比べられます。すごく正直な気持ちを言えば、経営者としては父がはるかに上であり私の憧れでもあるので、比較されることにイラとすることはないのですが、比較を払拭できる確固たるものが自分のなかではまだないことにモヤモヤとした感情はあります。とはいえ、父を超えたい！　というものではなくて、自分はあくまで自分です。私の長所といえば即断即決と実践力。それはやはりカヌーの経験からです。どうするのか？　をその場で瞬間的に決めない

1.鍛えられた胸板、南崎さんのスーツ姿が際立っている秘密です　2.ネクタイの表情をだすため結び目を小さく固くしめていきます　3.合わせる靴はブラウン、これだけで印象がかなり柔らかくなるのです　4.スーツ姿が際立っているもう1つの理由が肩のライン、なだらかに落ちている肩のシルエットで優しげな雰囲気にしあがります　5.ネクタイはナポリの至宝マリネッラ、各国首脳クラスがつかう世界で四本しか生産しない品質には定評あるブランドです

5